

---

# ZOO

伊東歩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ZOO

### 【Nコード】

N9884L

### 【作者名】

伊東歩

### 【あらすじ】

俺はこの街で掃除屋をしている。もちろん、違う意味の掃除だ。依頼の数だけドラマがある。しかし、俺には何の興味もない。仕事は仕事、だ。

## 未熟なカナリア

例年より少しばかり早い初雪が観測されたと朝のニュースで知った。今日も夕方過ぎからちらほらと、雨とも雪ともとれないものが空から舞い降りている。街は早くもクリスマス一色となりつつある。イルミネーションが通りを彩り、クリスマスソングがそこら中から聴こえてくる。歩道橋の上から見るとその景色はなかなか悪くない。冷たい風が吹く。俺は真っ黒いロングコートの襟を立ててその侵入を防ぐ。

「今年のクリスマスは独りだ。あんたも？」

隣にいる女が言った。真っ白いパーカーにレザーパンツ。化粧は黒を基調とした濃い目のメイクだ。整った顔立ちではあるが、いかんせん俺は髪の毛の短い女は嫌いだ。まあ関係ないことだが。女は歩道橋の手すりに背中を預けている。視線はさっきから空を見上げたままだ。

「雪が好きなのか？」

「んーどうだろ？あたし北のほうの出身だから雪はあつて当然って感じだし」

俺はふと左腕を見た。腕時計だ。23時。まだ時間がある。つい30分ほど前、初めてこの大崎由美と出会った時のことを思い返した。

俺がここに来たのは20時にもなっていない頃だ。それからこの寒空の下何時間も立ち続けていた。俺がもたれていた手すりはずでに人肌以上の温もりを持っているのではないだろうか。確認のため写真を取り出す。ボーイッシュな女が写っている。歳は20歳前後といったところだろうか。大崎由美。今回のターゲットの名だ。由美はこのあたりに住んでいるらしい。男女4人でバンドを組んでいて、メジャーデビューを目指し日々練習、ライブに励んでいるらしい。スタジオから4人で歩いて帰るのだが、この歩道橋の前で由美

は一人になる。調査済みだ。今日もいつも通り練習を終え、帰宅のためこの橋を通るはずだった。ただ一つ誤算があったとすれば、いつもよりも早いのだ、帰宅が。何気なしに目線を右にずらしたとき、数人のカッブルや会社員風の男女に混じって由美の姿が確認できた。ギターのケースらしい黒く細長いバッグを肩にかけている。時計を見る。22時半。これでは予定より長く会話をしなければいけないではないか。俺は人と話すのが嫌いだ。初対面の人間ともなると更にだ。しかし仕事だ、やらざるを得ない。そんな事を考えていると何も知らない由美が俺の前を素通りしようとするところだった。慌てて呼び止める。

「あの、申し訳ないが少し俺と話をしてくれないか？」

はじめ、由美は自分に投げかけられた言葉だと気付かなかったらしく、歩みを緩める気配すら見せなかった。

「ちょっと、聞いてるか？」

「え？あ、あたし？」

ようやく少しだけ歩くスピードを落としてくれた。しかし立ち止まるまでには至らない。まあそれが普通だろう。横に並ぶ。

「何？ナンパ？」

おどける様な笑顔。歩みは止まらない。

「期待に添えなくて残念だがそうじゃない。勧誘でもない。とりあえず話をしてくれればいい。まあ無理にとは言わないが」

そう、別にここじゃなくとも問題はない。多少面倒ではあるが。だが俺の予想に反して由美は更に歩みを緩めた。そして、止まる。

「あんな変な人ね。まあ帰っても寝るだけだし、ちょっとくらいならいいよ。」

「変なのはお互い様のようだな。まさか本当に止まってくれるとは。」

「止めておいてそんな事言う？ま、いいけどね。」

由美は肩からギターケースを下ろした。手すりの足の部分に立てかける。そして自分の背も手すりに預けた。そしてクリスマスは一

人だの出身がどこだのと喋った。しばらく沈黙が続いた。

「何か言わないの？」

「そうだな」

そう言って三度腕時計に目をやる。そうそう進んではくれない。

「ずいぶん時間を気にしてるみたいね。何か待ってるの？」

「ちよつとな」

「あんた、私たちのファンってわけじゃないわよね？」

「残念ながら、ただの仕事だ。しかし何故だ？」

「何故分かったかって？当然よ。ファンの態度じゃないでしょ、そんなムスツとして黙ってるなんて」

鋭い、のか？俺の態度が露骨過ぎたのか？まあどちらでも構うまい。

「何故バンドを始めたんだ？」

時間稼ぎの質問に過ぎなかった。そんな事これっぽっちも興味ない。

「そうだなあ・・・あんた『K R O W   K R U E』ってバンド知ってる？」

俺にはこれといった趣味はない。ただ音楽を聴くのは好きだ。当然今由美が口にしたバンドも知っている。

「2年ほど前にメジャーデビューしてからずっとヒットを飛ばし続けてるやつらだろう。それが何だ？」

「高校二年の時、学園祭である男子生徒がそのK R O W   K R U Eの曲のコピーを披露したの。凄かった。一瞬で虜になっちゃってね。コピーバンドなのによ。その時思ったんだ、あたしの道はこれだ！  
って」

「計算が合わないか？」

「メジャーデビューする前よ。当然誰も知らなかった。堀クンたちのお陰だな」

堀というのはおそらくそのコピーバンドの一人なのだろう。

「ってあれ？今計算が合わないって言ったよね？」

言われて気付いた。口が滑ってしまった。

「あたしの歳を知ってるの？さっき仕事とも言ってたけど、あたしと話すのが仕事？どうみても芸能記者じゃないよね」

腕時計を見る。もう少し時間がありそうだ。

「新沼健太を知ってるだろう？」

「え？まあ、ね」

「彼氏だな」

「元、彼氏だよ。ちょうど1年前に別れた。あれ？こんな感じの歌詞の唄あったよね」

由美はたいして面白くもなさそうに笑っている。真実を知ったらこの娘はどんな表情をするだろう？ふと試してみたくなった。いざとなったら冗談だと笑い飛ばせばいい。どうせ信じられるわけがない。

「そいつに依頼された。大崎由美を殺してくれ、と。俺は掃除屋だ、殺し屋ともいうな」

再び沈黙が訪れた。案の定、この男は何を言い出すのか、そんな顔だ。

「ケンタが、あたしを？」

軽く頷く。

「驚いた」

「だろうな。ついでに言っておくと指定日もある。12月9日。つまりあと20分もないな」

さすがに言い過ぎたか？今更冗談でしただけで笑ってもらえるとは思えない。

「12月9日か。ケンタらしい、二人の記念日だしね」

俺の話を受け入れているのだろうか？その上でこの態度だとしたらこの娘は相当な度胸の持ち主だと言えよう。何か言いたそうな気配を感じた。まだ時間はある。付き合おうじゃないか。無言で促す。「その日あたしの誕生日なんだ。それでもって、ケンタと付き合い始めたのが2年前のその日で、別れたのがちょうど1年後。そうい

えばなんだかんで誕生日プレゼント一度ももらってないや」

思い出して悔しそうな顔をした。

「別れたくないって泣かれたんだけど、あれ、泣いてはいないか？  
まいいや、でもまさか殺そうと思うなんて。あたしだって別れたくて別れたわけじゃなかったのに」

そう言ってふくれっ面をした。そんな軽いものじゃあないんだが。  
「お互いに別れたくなかったわけだ。じゃあ何故そんな事を？」

「付き合い始めて半年くらいだったかな？バンドのコンクールに出  
ただけど、その時のあたしはバンドにケンタに、でどっちも中途  
半端だった。結果コンクールは不甲斐ないどころじゃなかった。そ  
れで、どちらかに決めようって思ったの」

「で、バンドが勝ったわけか」

「そういうこと。ねえ、一つお願いがあるんだけどいいかな？」

「何だ？」

「あたしを殺すんだったら9日になる前に殺してくれない？後ろ向  
いて喋っとくからさ、分からないようにささっとやってよ。あ、そ  
の前に一服」

由美はパンツのポケットからタバコとライターを取り出し、慣れ  
た手つきで火を付けた。この娘は俺の話を本当に信じているのだ  
ろうか。もしかしたら冗談だと踏んで、その上で話を合わせている  
だけかもしれない。どちらにしろ結果は同じなのだから構わないが。  
「しかし何故9日になる前なんだ？」

由美は手すりから背中をはずし、俺に背を向けた。本気なのだろ  
うか？分からない。

「20歳になっちゃうの、あと10分くらいで」

「未成年がタバコ吸っちゃあ駄目だろう」

俺がそう言くと由美は悪びれた様子もなく笑った。

「そう堅いこと言わないでよ。あたしはね、大人になるのが怖かつ  
た。今でも怖くはないけどやっぱり嫌。あたしはいつまでも夢を追  
いつづける無邪気な少女でいたいだよ。だから20歳になる前に殺

してほしいの」

そういうものか。腕時計を見る。そろそろだ。

「あたし病気なんだ。不治の病ってやつ？もう長くはないかも。病院行ってないから分らない。バンドの皆には悪いけど黙ってる。療養で時間を削ってる場合じゃないの。あたしはひたすら音楽っていう夢を追いつづける少女なんだから」

時間も時間だけに通行人はさほど多くない。俺は誰にも気付かれぬようコートの内側からサイレンサー付きの拳銃を取り出した。

「ケンタどこ知ったんだろ？多分それを知ったからあんたにこんな依頼をしたんだろうね。そうだ、あんたの名前を教えてよ。自分を殺す人間の名前も知らないなんてなんか嫌じゃん」

ターゲットに名を名乗るなど今までにないことだ。しかしそれは聞かれなかっただけのこと。最期なんだし、いいか。俺は由美の耳元でそつと囁いた。由美は嬉しそうに頷く。

「いい名前じゃん」

これで最後だ。もう一度腕時計に目をやる。俺は由美の望みどり少しだけ早く事を済ませる事にした。

「もしケンタに会うことがあったら伝えてよ。初めてにしちゃなかなかのプレゼントだよ、ありが・・・」

言葉は最後まで発せられることはなかった。タバコが指をすり抜け地面に落ちる。由美の体がぐらりと揺れる。それをすばやく抱きとめ、手すりに寄りかかるような形で両腕を掛ける。白いパーカーの胸元からじわじわと赤いシミが広がる。俺は誰にも悟られぬようそつとその場を離れた。歩道橋を降りる。歩道から見るイルミネーションは、歩道橋からのそれとはまた違う表情を見せている。これもこれで悪くない。数m進んだところで歩道橋を振り返った。由美は先ほどと同じ姿勢のまま、心なしかほんの少し口元に笑みを携えていた。写真以外でまともに顔を見るのはこれが初めてだ。なかなかいい笑顔じゃないか。そして俺は今頃になってふと、由美の歌を聴いてみたいと思った。



## 護るライオン

扉を開けた瞬間に俺は顔をしかめた。その店はサラリーマンらしき男たちの笑い声や煙草の煙や匂いが充満していた。その中で僅かに感じられる料理の香りなど決して食欲を誘ってくれるものではなかった。居酒屋など何年ぶりだろう。

「おお、こつちこつち」

一人の男が座敷から俺を手招きしている。座敷に上がり、俺はうんざりといった表情でテーブルを挟んで向かいに座っている男を睨んだ。

「そんなムスツとしてんなよ。せつかくの男前が台無しだぜ」

男は名前を富樫明と言った。本名かどうかは分からない。二人の前に大きなグラスになみなみと注がれたビールが差し出された。

「じゃあとりあえず、かんぱーい」

無理やり俺にグラスを握らせ、割れんばかりに自分の持ったグラスをぶつけてきた。

「かんぱーいじゃない。何なんだ？突然」

富樫は一気に飲み干してしまう勢いでごくごくとビールを喉に流し込んでいった。しかたなく俺もひとくちだけ口に含む。飲み込むと、途端にぴりぴりという刺激とともに苦味が襲ってきた。俺はビールをはじめ全てのアルコールが苦手だった。4、5品ほど料理が出された。富樫があらかじめ注文していたらしい。それをつまみながら談笑をはじめた。と言っても笑っているのはもっぱら富樫だけだった。俺は一秒でも早くこの空間から出たいと、信じてもない神に祈った。ほどなくして胃が落ち着いたのか富樫は箸を置いた。グラスはすでに3杯目となっていた。

「そろそろ焼酎にしようか。」

まだ俺を呼んだ理由を言わない気らしい。いい加減我慢の限界だぞ。腰を浮かす。

「一人で盛り上がるんじゃない。早く話をしろ。でないと俺は帰るぞ」

「まあまあ待てよ。分かった、話すよ。あ、お姉さん焼酎お願い、芋ね。お湯割りで」

ようやく話してくれる気になったか。ここは安堵のため息をつくべきだろうか。どうでもいいか。

「実はな、お前に仕事を依頼したい」  
「は？」

いきなり何を言い出すんだ、この男は。富樫の前にビールのときとは違った形のグラスが置かれた。軽くくいつとあおる。

「くく、染みるねえ」

「そんなことはいいんだよ。何なんだ、依頼するだなんて」

「そのまんまの意味だ」

「そうか。じゃあその前に一つ聞いていいかな。お前の職業は何だ？」

「実はな、お前と同業者なんだよ」

「知ってるよ。しかも仕事の速さは業界随一だろう。お前がやればいいじゃないか」

富樫は残りを一気に飲み干した。

「分からないかなあ、それが出来ないから言ってるんじゃないか」

「ということはダブルブッキングしてしまったということか？」

「いや、その日の俺の仕事は一つだけだ。それは俺がやる」

「じゃあ問題ないな。帰るぞ」

俺が再び腰を浮かすと富樫は半ば必死に掴みかかってきた。

「まあ待てよ。十年来の親友だろう、とりあえず話だけでも聞こうじゃないか、な」

いらいらしながらもとりあえず腰を下ろすことにした。というより富樫が手を離してくれないのでそうせざるを得なかったのだ。

「で、ターゲットはこの男なんだけど」

そう言って富樫は一枚の写真をテーブルに出した。目を見張る。

それは俺の気持ちを動かすに足る力があつた。

「なるほど、とりあえず話だけでも聞こうじゃないか」

無意識に先ほどの富樫の台詞を繰り返していた。

一週間が経った。とある県立文化会館。ここが今回の仕事場所だ。といっても俺がいるのはその中ではなく、そこからすぐの高台にある公園。その滑り台の上だ。なんとも目立つ場所である。しかし調査の結果ここが一番のベストポジションのようだったので仕方ない。今日はその文化会館で子供たちの音楽発表会が開かれているらしい。その観客の一人としてターゲットが現れる。どこの席に座るのかということまでしっかり確認している。でなければこんな場所から狙えるはずがない。俺は掃除屋ではあるがスナイパーではないのだ。腕時計を見る。開会までまだ時間がある。そしてターゲットを仕留めるのは更に後、発表会も終わりの方だ。ずいぶんとめんどくさい仕事だ。俺は富樫に文句の一つでも言つてやりたかった。しかし富樫は富樫でもうすぐ仕事だろう。文化会館の周りが騒がしくなってきた。人が集まり始めている。

「ようやくか」

思わず一つ呟いてしまった。この位置からだ文化会館の観客席とステージが一部が見渡せる。俺は徐々に埋まりつつある席を見ながら、ターゲットを探した。そして、

「よし、どんぴしゃだ」

それから2時間近くうとうととしてしまった。距離がさほど遠くないお陰で文化会館の方から微かに歌声や音楽、そして拍手が聞こえてくる。腕時計に目をやり、そして文化会館に移す。ステージに一人の女の子が登場した。めやすとなる子だ。あの少女が出てきたということはそろそろ時間だ。俺は気を引き締めるよう両手で頬を叩いた。

「聞かせてもらおうか。お前は何故こいつを殺したいんだ？」

一週間前の居酒屋。俺は目の周りをうつすらと赤く染めた富樫を問い詰めた。

「そもそも知ってると思うが掃除屋が掃除屋を狙うのはご法度だぜ。もしそのことが業界で広まったら、下手したら生きちゃいられない」

つまり富樫の依頼相手は何を隠そう同業、掃除屋なのだ。

「分かってる。無理を承知で頼んでるんだ」

「じゃあ一筆書いてくれよ。私が依頼しました、みたいなのをさ」

俺はなるべく平静を保っていたが内心困惑していた。富樫が何故こんなことをするのか意味が分からない。

「俺が納得するまでちゃんと説明してくれよ」と念を押した。

「分かってるよ。じゃあ説明するぞ。ある日こいつに一つの仕事が入った。ターゲットは6歳の少女。怨恨かね、まあ珍しいことじゃない。こいつはあっさり引き受けた。そして早速仕事に取り掛かった。少女が下校の時一人になるのを見計らって背後から近付いてった」

「簡単な仕事だな」

少し間があいたので俺は相槌を打った。

「まあ簡単だ。しかし、そこでこいつはふと気付いてしまったんだ。この少女は自分の娘だと。その娘が幼いころに妻と離婚して、その元妻は再婚してたんだ。だから名前を聞いても分からなかったんだ」

愚問だと思いつつ、俺は聞いた。

「それで、こいつは仕事をこなしたのか？」

めやすと定めた少女がもうすぐで歌い終わる。俺は余計なことを考えまいと全神経を集中させた。ターゲットと俺との間には文化会館の窓ガラスがある。その窓ガラスには直径4cmほどの丸い穴が

空いている。昨日までに俺が空けておいたのだ。丁度その穴の先にターゲットの男がいる。ステージの位置の関係でこちらに背を向けているが間違いない。歌が終わりに近づく。男が不審な動きを始めた。歌が終わり、場内に拍手が響き渡る。今だ。もう一度神経を集中させ、躊躇うことなく引き金を引いた。不意に男の動きが止まる。がつくりと首だけうな垂れる。俺は大きく息を吐いた。

「一週間後、文化会館で音楽発表会が開かれる。その時に仕留めると依頼主には言っている」

「なるほど。そこで俺が殺ればいいんだな」

富樫は大きく頷いた。そして焼酎のおかわりを頼んだ。

「聞いていいか？何故自分の娘だと分かったんだ？名前も変わって、顔だつて分からなかっただろう」

「特徴があつたんだ」

「特徴？」

「娘は首の後ろに3角形を描くように3つのホクロがあつたんだ。それが、ターゲットの少女にもあつた」

富樫は水でも飲むかのように焼酎をあおった。

「俺はこの仕事に誇りを持つて。一度引き受けた依頼はなんとしてもやり遂げなきゃならん」

「じゃあその娘を殺すのか？」

「俺に何もなければな。たとえば他の掃除屋に殺されるとか」

そう言つて富樫はにっこり笑った。人懐っこい笑顔だ。

「なるほど、掃除屋が殺されればその少女を殺すよう依頼した人間への警告にもなるわけだ。次やつたらお前の命がないぞと」

「あの子には父らしいことを何一つしてやれなかった。」

「俺には分からないな。他人の命を守るために自らの命を犠牲にしようなんて」

「いつか分かる時が来るさ。お前が父親になつたらな」

俺が父親になる日など来るのだろうか。

「このターゲットの写真、貰っていいか？」  
「はっはっは、変わった趣味だな」

拍手はまだ鳴り止まなかった。どうやらあの少女の歌が最後の演目だったらしい。観客は皆総立ちになっている。ただ一席を除いては。そのすぐ後ろの席の女が妙に慌てたように落ち着きがないのが目についた。気付いたのだろうか。それにしてもあまりに騒がなすぎる。そこまで考えてふと思考を止めた。

「まあ、俺にはお前の依頼主なんて関係ないしな。」

ステージの脇からぞくぞくと子供たちが出て来た。とりを務めた少女が振り返ってそれを招く。首もとの3つのほくろが印象的だった。俺は滑り台の上でバグから一升瓶とコップを取り出した。焼酎だ。それをなみなみと注いで、コートのポケットから写真を取り出す。

「乾杯だ、十数年来の親友よ」

居酒屋での富樫の言葉を思い出しながら一気飲み干した。喉、食道、胃と、熱い液体が流れ込むを感じた。

「うげ、きつつ」

文化会館に目を戻す。ステージには子供たちだけでなく大人もいる。おそらく子供らの親だろう。そうだ、子供の発表会には親が見に行くものだ。

「ははっ、良かったな。最後に親らしいことしてやれたじゃないか」  
俺は一升瓶を持ちばしゃばしゃと写真に掛けた。写真の富樫はどこか嬉しそうに微笑んでいるように見えた。

## 夢見るバク

眠い。やけに眠い。いつからだろう？たしか今日の朝からだ。よほど疲れたらしい。しょぼしょぼとする目を擦りながら俺は地下鉄のホームに吸い込まれた。ホームにはほとんど人がいなかった。たしかに少し遅い時間ではあるがそのせいではないだろう。もともとこの利用客は少ないのだ。電車が入ってくる。それに乗り込みドア付近の手すりにつかまった。そのまま目を瞑って地下鉄のゆれに身を任せていた。

「座つたら？」

不意に女の声が聞こえた。はじめ夢かと思った。

「ねえ、座つたら？」

まただ。どうやら夢ではなさそうだ。振り返る。連結部側の3人掛けの座席にその女は一人で座っていた。20歳後半くらいだろうか。白のダッフルコートに青のスカート。いつも思うのだが女性はスカートなど履いて寒くないのだろうか。足丸出しではないか。まあそんなことはいいとして、

「何か言ったか？」

「だから、座つたら？って。あなた眠そうだし、第一こんな空いてるのに立ってるなんておかしいよ」

周りを見渡す。2組のカップルと数人のサラリーマン、OL。最後尾には学生らしき集団が地べたに座り込んでいる。

（いすに座ればいいのに。まあ俺も立つてるが）

つまり席はがらがらなのだ。たしかにそんな状態で立ったままうとうとしているのはおかしい。職業柄ついドアに近い位置にいたくなってしまうのだ。しばらく迷った挙句座ることにした。乗り気はしなかったものの女性の隣に座った。そこが一番近かったのでそれが自然だろう。できれば初対面の人間の近くは嫌なので離れたかったが、露骨にそんなことができるはずもない。しかしやはり立って

いるのと座るのでは全然違う。ふつと意識が飛びそうになる。そうだ、腕時計のアラームをセットしよう。これでうっかり寝過ごした、なんてことはなくなるはずだ。安心して眠りにつける。夢に引き込まれそうになったその時だった。がさがさ。がさがさ。

（うるさいな。何やってるんだ？）

隣の女性がなにやら自分のバッグをまさぐっている。

「何してるんだ？」

「あ、ごめんなさい。うるさかった？」

「いや、まあちょっと」

ちよつとじゃなくだいぶだ。まあそれをはつきり言うほど俺は子供ではない。少しくらい我慢してやろうじゃないか。

「本を探してて。あ、あつたあつた」

それは今日買ったものらしく茶色い紙袋に入っていた。それをバリバリとあける。意外と音が立つものだなと思った。袋をバッグに戻す。バリバリがさがさ。

（うるさいなあ）

そのとき、バッグの中になにやら物騒なものを見つけた。鉄だ。ただの鉄のように見えはするが、問題はその数だ。1本ではないのだ。数本の鉄がバッグの中でひしめきあっている。俺の目線に気付いたのか女性が照れくさそうに笑った。

「あはは、驚いた？まあそりゃそうよね」

「何なんだ？その鉄の量は」

女性は何かを言おうとして止め、ちよつと考えて微笑んだ。

「さてここで問題。私は何をしている人でしょう？」

（いるよな、すぐクイズにしたがるやつ）

面倒だったがしばらく付き合ってやることにした。無下にあしらって寝ようとするのはさすがに失礼だ。

「鉄関係だろう。美容師か」

「正っ解？いや、惜しい、かな」

女性は首を捻った。



「問題出しといて何だそれは」

うんざりだ。まとまっけないなら静かにして寝かせてくれ。

「正解は、トリマーでした。まだ見習いだけどね」

トリマー？聞いたことあるようなないような。

「うーん、分かん」

「ペットの美容師ってこと」

「ペットって、犬とか猫？」

「そう」

「そうって・・・」

なんだってペットの散発を美容師に頼まねばならんだ。最近は何でも商売になるのだな。少し感心してしまった。

「まあ人殺しが金になるくらいだしな」

「何か言った？」

「いや、何も」

さっさと話を切り上げて眠りたかった。今なら気持ちよく夢が見れそうだ。

「あなた、動物は好き？」

（またかよ）

うんざりしながら横目で女性を見た。

「まあ嫌いじゃないな。あんたは？」

逆に質問してやった。そして思う、質問し返さなきゃ話は終わってたんじゃないか？しくじった。

「もちろん好きよ。じゃなきゃこんな仕事選ばないって」

まあそれはそうだろう。

「私は日本一のトリマーを目指してるの。そして私の手でいろんな動物をきれいに着飾ってあげたい」

「夢を持つのはいい事だな」

「でしょ。あなたの仕事は？」

「サービス業だ」

質問されたときはそう答えるようにしている。まあ間違っではない

ないだろう。

「そう。それで、今から帰宅？」

「だな」

それから幾度となく眠りのふちに立たされるもその度にことごとくこの女性に邪魔されていた。そして、ようやく開放される時がきた。

「あ、じゃあ私ここなんで。それじゃ」

そう言って女性は立ち上がった。俺の前を通り過ぎドアを出ると同時に、アラームが時を告げる。

（寝てないから意味なかったな。）

「ちよつと待ってくれ」

俺は立ち上がってその女性を呼び止めた。ドアを挟むように対峙する。

「な、何？」

女性は驚いた様子でこちらを見ている。もしかして何か勘違いしてないだろうか。

「いや、さっきちよつと嘘ついちゃってね」

発車のベルが鳴る。

「何を？」

「さっき仕事帰りと言ったが、本当は今からが仕事帰りなんだ」

「え？それはどういう・・・」

不思議そうな顔をした女性の表情が一瞬で変わった。驚いたような、更に意味が分からないというような、なんとも言えない表情だ。ぐらりと体勢を崩す。それと同時にドアが閉まる。倒れた女性を残し電車は軽快に走り出した。

「ふあゝあ。眠い」

腕時計を見た。俺が降りる駅までは1時間近くある。十分に寝られるな。座席に座り直す。やはり知らない人間と座るより一人の方が気が楽でいい。

「やっと夢が見られるよ」

言いながら意識が遠のいていった。そしてその途中で大事なことを思い出していた。

（そうだ、アラームかけ直すの忘れてた。）

## 添い猫

小洒落たカフェというところはどうも馴染めない。かと言って居酒屋や大衆食堂も苦手なのだが。

昼過ぎの客の入りにしてはやや多いのではないだろうか。あちこちでざわざわと話し声が耳につく。この状況での唯一の救いは目の前にいる髪の長い女性だ。顔立ちも立ち振舞いも日本的で俺の好みに近い。その整った顔立ち、切れ長の目が見せる憂いは、なかなか艶美だ。

「具体的に聞かせてもらおうか」

俺は事務的に言った。美しく好みの女性とはいえ初対面だ。さつさと終わらせたい気持ちは変わらない。

「はい。私には付き合い始めて4年にもなる彼がいたんです。自分で言うのもおこがましいとは思いますが、それはそれは仲睦まじい二人だったと感じていました。もちろん結婚も考えていました」

容姿に合う透き通った声だ。仕事でなければ聞き惚れてしまいうなくらいだ。

「先ほど彼がいたと言いましたが、言葉のとおり今は昔。つい3ヶ月ほど前に別れてしまっただけです」

原因は？などと聞くべきだろうか。まあそうした方が相手が自分の話を聞いてくれると感じるだろうし話やすくもなるだろう。だがいかんせんそんな話にこれっぽっちも興味が湧かない。それに「その理由は」

ほらな。どうせこっちが聞かなくても向こうは喋ってくるんだ。余計な口を挟んで話を間延びさせたくはない。

「ありきたりなんですけど、彼の浮気なんです。あれほど好きだと言ってくれていたのに、他に女がいたなんて・・・」

女は上品な手提げバッグからハンカチを取り出し目頭に当てた。その仕草は美しくも見えたが同時に茶番にも思えた。安いドラマの

ワンシーンみたいだ。

「殺し屋さん」

女が急に身を乗り出し俺の両手を掴んだ。とっさにカウンターを見舞わせそうになるくらい俊敏な動きだ。それより、

「こんなところでその呼び方はやめてくれないか」

「この3ヶ月間私は彼を必死に忘れようと思いました。あいつは最低な男だった、別れて正解だって。でもそれだけじゃだめなんです。詳しくは申せませんが、私は裏切られることが何よりも苦痛なので。それこそ、死よりも」

潤んだ瞳でこちらを見つめている。きらきらと光るそれを見ながら俺は思った。

（さとうなんちゃらも真っ青だな）

「それで、俺に依頼しに来たわけだな」

そこでようやく女が俺の手を離れた。先ほどハンカチを取り出した小洒落たバッグを再びまざる。

「この人です」

一枚の写真を取り出した。そこには綺麗な夕焼けをバックに仲良さそうに寄り添っている男女が移っている。女の方は今日の前にいるこの女だ。

「高原幸助、28歳。コンピュータプログラミングの仕事をしています」

聞いてもいないのに詳細を教えてください。そんなこと聞いても俺には何の得にもならないのだが。

「しかし浮気されたからといって殺すというのはいささかやりすぎではないのか？」

女はまるで睨むように上目遣いでこちらを見ている。

「先ほども申しあげましたとおり、私にとって裏切りとは死よりも辛く、悲しいことなのです」

「だからそれと同じくらいの苦しみを味わわせたい、と」

女はこくりと首を縦に振った。俺の手を握ったときと同じくらい

力強い動きだ。ようやくその言葉を出してくれた、と嬉しそうにも見える。考えすぎだろうか。ちらと腕時計に目をやる。

「何かご予定が？」

「え？ああいや、今何時かと思って」

「お話中に時間を確認するなんて失礼ではないですか」

先ほどまでより若干力強い声でそう言った。思わず「すまない」と謝ってしまった。なかなか面倒くさい人間のようだ。周りに目をやる。先ほどより客が減ってきている。もう皆昼休みも終わり、午後の仕事をはじめている頃だろう。じきにこの店も客がいなくなるはずだ。俺たちもいつまでもここに居るわけにはいかない。店員に怪しまれてしまうからだ。

「依頼内容は分かった。では少し質問してもいいかな？」

「何ですか？」

「今まで何人の男と付き合った？」

女の顔にさつと警戒の色が走った。

「何でそんなことを聞くんですか？」

「調査のためだ。君の話を十分信頼するに足る情報を得たい。」

「・・・2人目です。」

「前の交際は何故終わった？それも彼の浮気か？」

「そうですね、何か？」

「その男は殺したのか？」

「はい？」

女は明らかに苛立ち、警戒している。少しやりすぎたか。再度腕時計を見る。

「だからお話中に・・・」

「失礼、癖だね。では、やる場所はどこにする？」

「やる場所、殺す場所ですね？では・・・ここでお願いします。」

ずいぶん早い決断だな。

「ここ、とはこの店のことか。何故こんな場所なんだ？」

「二人の思い出の場所なんです。」

女が悲しそうな、そして少し嬉しそうな表情を浮かべた。

「そうか。分かった」

俺はカップに少しだけ残ったコーヒーを飲み干すと、伝票を持って立ち上がった。女がそれを見て慌てて立ち上がるうとする。手を出してそれを制する。

「座って待つてるといい」

女は俺の言葉に素直に応じ、椅子に座りなおした。

「ありがとうございます」

レジは女の後方にある。女の脇を通り抜けレジへと向かう。その一瞬で十分だった。女は背もたれに体を預け、頭だけうな垂れる。瞬時に見て死んでいるとは誰も気付くまい。

「二人の、因縁の場所なんです」

4日前。俺はどうしても馴染めない小洒落たカフェに来ていた。はじめに殺す場所を指定してきたのは初めてだ。よほど怨んでいるに違いない。

「俺には付き合い始めて4年になる彼女がいました。真剣な交際でもちろん結婚も考えていた。でも、山村静子。あいつのせいで俺の人生はめちゃくちゃだ。殺してやりたい。お願いします」

怒りに任せて言いたい放題の男の言葉に耳を傾けるはずもなく、俺は聞いている振りをしてぼんやりとコーヒーを飲んでいた。数十分後、ようやく男の口が止まった。

「つまりこういうことか？その山村静子という女が、この店であんたを見て一目ぼれした。そしてあんたの彼女を脅して別れさせ、自分が彼女になった。それを知ったあんたが別れ話をすると、女はストーリーカーになってしまった。こんな感じでいいな？」

「はい」

なんだ、5秒で済むではないか。俺の数十分を返せ。

「あの時あの女に会わなければ今ごろ美紀と結婚していたはずだ。仕事だって順調にいったのにあの女に邪魔されて・・・」

「悪いがそういう話を聞くのは仕事のうちにはいつてない。どうしても聞いてほしいなら電話相談室にでも電話掛けてくれ」

「あ、すいません」

「その女の写真あるか？」

「は、はい」

男がジャンパーのポケットから一枚の写真を取り出した。綺麗な夕日をバックに男女のカップルが寄り添って写っている。それを見て俺はおや、と思った。

「これが、美紀に別れを決めさせた写真です。私たちは付き合っているのだからお前は身を引け、と。でもよく見てください。仕事柄よくパソコンいじるんですぐぴんときたんですけど、これすげ替えなんです。俺と美紀の写真をどこからか入手して、自分の顔を貼り付けた偽物なんですよ」

よく見ると顔と首の肌の色が微妙に合っていない。なるほど、さきほどの違和感はこれが。

「俺がこれを見なければずっと知らないままでした。でもこれを見て真実を知った以上、放つてはおけない」

しかし一時は付き合った女だろう？そう思ったが口にはしなかった。まあどんなにいい女でもこんな裏の顔を見せられたら百年の恋も冷めるといふものか。

「自分なりに調べてみたんですが こう見えて顔広いです あの女、どうやら前にも同じような事をしてそのうち何人かは死にまで追いやってるみたいなんです。おそらく、あなたみたいなプロに依頼して。でなきゃとづくに捕まってるはずだ」

この男どんな情報網を持っているのかと気になった。

「この手の女に俺も一度依頼を受けたことがある」

口に出してから気付いた。何故こんな話をこの男にしているのか。まあ暇だしいいか。

「手を貸したんですか？」

「仕事をしたまでだ。俺には関係ないしな」



男はしばらく絶句していた。無理もないだろう。下手したら自分が今目の前にいる男に殺されていたかもしれないのだ。うつむき、ぽつりと呟く。

「男なしに生きていられない女なんでしょう。本性を隠して近づき、いざとなったらその皮を脱いで襲い掛かってくるんだ」

普段は猫を被っているわけだ。写真を見る。なるほど、このつり目は猫に似ている。

支払いを終え扉へと向かう。店を出るとき、女の背に目を向けた。その姿はまるで男にフラれ、がつくりと肩を落としているようだった。まあ状況はあながち間違っていないかもしれないな。そしてふと女のつり目を思い出して呟く。

「裏切られるより死がいいんだろう？ 望み通りにしたまでだ。化けて出るなよ」

俺だけだろうか、猫は他の動物より霊的なものを感じる。化け猫はいても化け犬など聞いたこともないし。店を出た途端黒猫が俺の前を横切った。去って行く黒猫の背を見て、また呟いた。

「化けて出るなよ」

黒猫はちらとこちらを振り返り、にゃあとひとつ鳴いて去っていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9884/>

---

ZOO

2011年1月26日22時55分発行